

食・泊・憩 —— 島の「足りない」を起業

「モトエカフエ」ほか運営／イターン 近藤真一郎



真鍋島：笠岡港から約31kmにある笠岡諸島の1島。面積1.48km²、周囲7.6km、人口194人(平成30年4月末現在)。本浦と岩坪の2集落があり、港の背後に民家が密集している。年間を通して霜のおりない温暖な気候のため、かつては寒菊の栽培が盛んで、花の島として知られた。

周辺離島より恵まれた環境の島

真鍋島へ一家で移住したのが約一〇年前。当時、島では学校の存続を図るため、子どもを持つ世帯の定住促進の動きが活発でした。その波に乗ってやってきた私たちでしたが、根本的な過疎対策の必要性を認識していましたので、次の移住に繋げるべく、今度は募る側として中心的に移住体験ツアーなどの活動に取り組むようになりました。一年目こそ成果が出たもののその後が続かず、キーマンだった行政職員の異動などをきっかけに、定住促進のみならず、島全体の地域活性化の動きもやがて低調になっていきます。

移住当時から本土側にある漁協事務局に勤め、定期船で島から通う日々だった私は、決して地域に密着した生活を送っているとは言えませんでした。地域の役回りこそある

程度こなしてはいましたが、やがて職場でのポジションが変わってくると意識はより仕事に向き、生活は安定する一方、学校存続はもとより島の将来に対する危機感すらも薄らいでいきました。だんだんと人が減っている認識はありましたが、環境変化は緩やかで、それが直ちに私たちの生活に影響するものではなかったからでしょう。真鍋島には小中学校をはじめ、郵便局、診療所、複数の商店などがあり、周辺の島と比較してもかなり恵まれた環境です。そのことが逆に危機感を湧かせにくくさせていました。

夫婦それぞれの危機感から起業を決意

そんな暮らしも一〇年目を迎えようとしていた平成二九年の初め、夫婦間では島暮らしを憂慮する話題が増えていました。人がいない、面白くない。その原因を改めて探っ

てみると、人口が約四割減少していたことが分かりました。ここでもようやく危機が眼前に迫っていることを自覚します。妻は移住当初から島で仕事をしていたので地域の事情をよく知っていましたが、島の危機よりむしろ、平穏ではあるけども年々退屈になるばかりの島の暮らしや交友関係などの発展性のなさに失望していました。生活に面白味がないこともやはり深刻な問題です。同世代の人間は転出などほとんどいなくなり、商店の減少あるいは大幅な営業縮小など、もともと進行していた過疎高齢化はさらに速度を増していました。

特に大きな問題もなかった移住生活でしたが、今後一〇年あるいはさらにその先を考えると、とても希望の持てる状況ではありませんし、やがてインフラが失われていくことも目に見えています。そのうち島で暮らせなくなるかもしれない、暮らす意味を失うかもしれない。それぞれ理由は少し異なりますが、これからは私たちがやるしかないという共通認識のもと、ともに脱サラし、真鍋島での新たな暮らしを築くため起業することを決めました。

以前から定住者を増やすことこそ根本的な解決への道筋であるという認識は持っていましたが、ただ定住だけを追い求めるのではなく、「関係人口」の増加を図ることによって一時的に島を維持、改善していくことへと方針を転換しました。最初から定住という高いハードルに挑戦するのはなく、関係人口を増やすことによってインフラを維持

し、島の知名度を高めつつ、定住に結びつく糸を手繰る。そのために島に「足りない」ものを私たちの仕事にしようと考え、始めたのが三つの事業です。

「足りない」ものに着目して始めた三つの事業

一つ目はいろいろな事情で五年ほど前になくなってしまうといった高齢者向け配食サービスでした。休眠状態となっていた施設をお借りし、以前は週三回だったものを週五回の提供として展開しました。関係人口増加に直接関わる要素は少ないですが、島のために島で新しいことを始めたという空気を島人に感じてもらうことは取り組みの第一歩としてとても重要なことですし、同じ設備を利用してツアー客向けの弁当づくりや、後述するカフェやゲストハウスで



平成30年2月にオープンさせたゲストハウス「INN THE CAMP」。

提供するメニューの調理などに活用することができそうです。幅広い食の提供ができれば、滞在時間の長いプログラムを受け入れることができるので、関係人口を増やす点においては重要なポイントだと考えました。

二つ目は宿泊施設でした。近年、若者がゼミの

活動などで島を舞台にさまざまな取り組みを行う動きが活発になっていきます。日帰りでの活動は時間的な制約もあって難しく、かといってご馳走が振る舞われる旅館に毎回宿泊することは経済的に厳しいものがあります。また、観光だけでなく島の文化や生活などに興味関心を持つ方の来島機会の伸びしろもまだまだあると見込み、安価で宿泊でき

るゲストハウス開設を計画。もともと商店兼家屋だった空き家物件を紹介していただき、その住居部分をゲストハウス「INNTHECAMP」に、店舗部分を三つ目の事業である気軽に食べたり休憩でき、交流の拠点ともなるカフェ「モトエカフェ」に改修しました。

島にもいくつか飲食店がありますが、軒並み海鮮料理を

島からのメッセージ

◎島に新しい息吹をもたらした近藤一家

10年前の8月5日、夏祭りの日、神戸在住の近藤さん一家は、移住先候補の一つであるこの島にやって来ました。最初の問い合わせでは辛口な話し口で、たぶんこの家族は島で暮らすのは無理だろう、と勝手に思い込んでいました。しかし、直接お会いして話をするうちに、何とも言えない親近感と、家族4人が第2の人生を歩むための場所を真剣に探しているという強い想いが伝わってきました。そして、もしかしたら島の将来に何か新しい風を吹き込んでくれるかもしれないという期待も感じました。

夏祭り後の懇親会が終わる頃には、ご主人はすでに漁協への就職が決まっていました。その段階では住む家すら決まっていなかったにもかかわらず。1カ月後、家族4人は島へ引っ越して来ました。真一郎さんは自分の夢の実現よりも子育ての場所選びを優先し、真鍋島に来ることを決めたのです。保育所や小学校で子どもが増えるだけではなく、30歳代のこれから真鍋島を担っていくご夫婦が島人として頑張ってくれることは、高齢化したこの島にとっては、この上ない幸せでした。

人口250人ほどの小さな島。ここへの移住は、言いたいことも言えず、我慢することも多く、大変なこともあったと思います。それから10年、子どもも増え、大きな家も建ちました。平穏な日々を過ごして安心してた矢先の去年3月、「仕事を辞めて起業したい。真鍋島に移住して10年経つけれど、僕は島のために何にもしていない」との相談を受けました。これから子どもたちにお金が必要となるのに、と思いつながらも、心の内では嬉しかったです。

料理は和洋中と何でもできるし、企画力、アイデア、センスも備えており、きっと島に新しく、勢いのある風を吹かせてくれるだろうと思いました。想像どおり、お年寄りの安否確認を兼ねた弁当配達、観光客向けの食事提供、ゲストハウスやカフェの運営と、2人の夢はどんどん広がって実現され、すべて島のためになっています。地域のためにも全力で力を貸し、意見を言う。前へ前へと進む実行力を持ち合わせています。なかなか島で生まれ育った人にはできません。

危機感がない島には、新しい風は入らないと思います。それを教えてくれた近藤一家を、これからもずっと全力で応援していきます。

(NPO法人かさおか島づくり海社 副理事長 森本洋子)



十数年前まで雑貨店（屋号モトエ）だった空き家をリノベーションした「モトエカフェ」。

憩を揃え、私たちの移住や起業に関する体験談などをソフトとして活用し、島との関係者を増やし、またその方々との関係性を深めていくことで、地域と私たちの利益を共有していくことが狙いです。

子どもたちのために島の灯りを増やしたい

特に観光資源のない真鍋島においては、日々の来島者数が非常に流動的であるため、ビジネスとしては低コストで規模の小さいプランを複数展開して全体的な収益の安定化を図り、継続性を保っています。

ただ、一度にたくさんの方のスキルを身につける必要があったため、勉強や研究はもちろん、準備にも何かと時間を要

提供し、予約制であったり安価ではないことから、食べるに困るという声を何度も耳にしていました。また、島にはゆっくり休める施設どころか日陰もほとんどありません。これは宿泊客にも共通する問題だと考えていましたので、すべての事業はセツトとして捉えています。

ハードとして食・泊・

しました。ゲストハウス兼カフェ物件の大部分は自分たちでリフォームすることにしており、その工事作業もさることながら、カーフェリーが就航していない真鍋島への資材運搬はとてつもない重労働でした。大きな荷物は宅配便では直接届きませんので、本土の運送会社の営業店に引き取りに行き、さらに自分の船へ積み込み運搬し、島でまた車へ積みなおして物件へ運ぶことを繰り返しました。複数事業を夫婦で賄うことの大変さも筆舌に尽くせないもので、協力や応援がなければビジネスとしてとてもやっていけないものではありません。ただ、資材運搬の経験に比べればまだ楽だと思えるのが幸か不幸かといったところですが、

起業して一年、予想以上に多くの方々と出会い、交流を深める機会に恵まれ、滑り出しは順調だと感じています。この島に迎え入れ、活躍の場を与え、手を差し伸べてくださった皆さんの恩に報いるためにも、島の灯りを少しずつでも増やしていきたいと考えています。そして何より、子どもたちがこの島で育つたことを誇りに、経験を宝物と思えるように。



近藤真一郎（こんどう しんいちろう）

昭和48年生まれ。平成19年に神戸市から真鍋島に家族で移住。漁協事務局勤務を経て起業。現在はゲストハウス、カフェ、配食サービスなどの事業を展開している。妻と子ども4人の6人家族。